
魔法少女と欲望の騎士

ヲカラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女と欲望の騎士

【Nコード】

N0926V

【作者名】

ヲカラ

【あらすじ】

死にたくないけど、やるしかねえ。謎の『化け物』に『あの時の見滝原』にとばされた『おれ』は街に呪いをふりまく『魔女』とそれを討伐する『魔法少女』、そして彼女らに影のように寄り添い共に戦う『魔法騎士』と出会う。果たしておれは生き残り、『あの日の真実』を掴むことができるのだろうか？ 超不定期更新です。気長にお待ちを。

それが、お主の欲望か？（前書き）

前の小説ほっぽり出してついやってしまった…
ノリと欲望のままに書きたいと思います。

それが、お主の欲望か？

『皆さんには、愛する人がいますか？』

真っ白な布に一滴のコーヒーが染みるように、世界がじわりと変わっていく。

『家族、友人、恋人。心から慈しみ、自らを投げ打ってでも守りたい人がいますか？』

白と黒、まるでオセロの遊戲盤のような歪んだ空間。

『そして、その人達を守るに至らぬ自分の無力を嘆いたことはありますか？』

淡々としやべるは白い少女。その脇にぼつん、と佇んでいるもう一人の黒い少女。

『世界は危機に陥っています。絶対的な悪と暴力、それが形成しようとしたものが降りようとしています』

周りの連中がざわついている。何が起ころうとしているんだ？

『しかし、私は闘う』

白い少女の目が『何か』を捉えた。

『来るがいい、最悪の絶望』

その言葉と共に、少女は消えた。

直後に悲鳴が響いた。振り返ると女子が首に何かを付けていた。付けていた？いや、何かが首に……喰らい付いていた。

直後に消える『それ』、おれに真っ赤なシャワーが降り注いだ。

またしても悲鳴、今度はおれの隣にいた奴が全身を『それ』に貪り食われていた。

足が、動かない。声も全く出ない。他の連中は悲鳴を上げて逃げ惑っているというのに。

指すら動かせない、小便はだくだくと流れているのに。

怖い、怖い、怖い……頭が痺れる……

と、右腕に激痛が走る。おれの肘から先に『それ』が喰らい付いていた。

ブチブチと肉の切れる音……ゴリゴリと骨を削る音……
そしてパキン、と……

叫び声を上げておれは飛び起きた。

また、あの時の夢だ。もう12年も前だと言うのに。

見滝原中学校集団失踪事件。当時、男女共学化して間もない見滝原中学校で教師や生徒が集団で『失踪』した事件だ。

だが、おれは知っている。アレは断じて失踪などではない。

生徒も、教師も『喰われた』のだ。『それ』としか言いようのないあの物体に。

そして、おれのズキズキと痛むこの『右腕』も……

この痛みは医者曰く、幻肢痛と言うらしい。鏡張りの箱の中に両手を入れ、手を握ったり開いたりすると痛みが薄らぐと言うが、おれの家にそんな大層な物はない。

そんなものよりも、長年付き合っているこいつの方がマシだ。

フューリー・チキンの50・9度、10年熟成モノ。今やこいつを飲まなければ何もやる気がしない。というか左手が震える。

ふと、瓶の脇にある手紙に目が行った。差出人は上条恭介、おれの中学時代からの友人だ。

手紙の内容は……結婚式の招待状だ。これまた中学時代の同級生の志筑仁美と結婚するとの事だ。

決めた、結婚式には行かない事にしよう。事件のトラウマに未だに怯え、酒に溺れて身を持ち崩しかけているおれなど行っても迷惑極まりないだろう。

ぐい、とウイスキーがなみなみと注がれたグラスを一気にあおる。きついが慣れ親しんだ味が豪快に喉を通る。

瞬間、喉に違和感。ウイスキーを盛大に嘔き出して倒れこむ。

「ゲホッ、ゲホッ、グガッ……」

むせた喉から赤黒いウイスキーが出た。いや、これは血だ。

それに胸も苦しい、心臓が早鐘のように鳴っている……とうとう酒の飲みすぎが祟ったか。

「おれ、死ぬ、のか。いや……だ。まだ、死にたく、ない」

血が喉から絶え間なく出てくる。胸が、痛い。

と、背後に誰かの気配がする。泥棒だろうか？

「だれ、だ？ いつ、入った？」

背後の人物は答えない。

「まあ、いいや。死に……たくなえ、けど、どう、せ、今死ぬ、んだしよ。物とか、金、とか、好き、なだけ……持っていけよ」

『それが、お主の欲望か？』

「な……に？」

『12年間待ちに待ったお主の欲望がそのような物かと聞いておる』

「そう、かい、そんな、もんで、良い……のなら、よ」

おれは、知りたい。あの日見滝原で一体何があったのかを。何故、みんな死ななきゃならなかったのかを。

『お主の欲望、確かに聞き届けた』

背後の人物は急にこちらに近づき、むんずとおれをつかみ上げ……

「ひ……」

化け物、そうとしか言えなかった。紫色のまるで恐竜……

『もはやこれほどしかないが、一人飛ばすには十分な量であるうな』

化け物は赤、緑、黄、灰、青の3個つつのメダルをおれの体に押し付けた。

すると、メダルはおれの体に吸収されていく。途端、体が熱くなる。

「な、んだ、こ、りゃ」

『円環の理、かの者の力より逃れる唯一の術なり』

おれの、からだが、とけ、る……

『折角じゃ、これも持って行けい』

今度は素早くてわからなかったがまたおれの体に何か入れたらしい。

『大事に、使えい』

化け物の体から銀のメダルが幾つも零れ落ち、それを合図に化け物が大量のメダルとなり砕け散った。

「う、あ、あああああ！！」

体からあふれ出す力は止まらず、次の瞬間……

世界が、爆ぜた。

それが、お主の欲望か？（後書き）

はたして「おれ」の運命は？
次回に続くう！！

夢で違いましたか？なんてとてもじゃないけど（前書き）

え？お気に入りか2件？

評価も4ポイント？

452アクセスのユニーク149人？

……ありがとうございます。

これからも精進しますのでよろしくお願いします。

夢で違いましたか？なんてとてもじゃないけど

「……また夢オチ？　というか二度寝？」

わたし、鹿目まどかは二つの夢を見た。

一つは、わたしと同じくらいの女の子の夢。街を包みこもうとしていた大きな何かに色んな武器を使って立ち向かって、それでも結局効果が無くって……

そこへわたしが現れて、ヘンな生き物に何か願い事を言っ、それからあとは……

何と言ったらいいんだろう。たしかに夢の中のわたしの願いは叶ったんだけど、それはちょっとさびしいなって。

もう一つはやけにリアルな夢。暗いと言うか、何と言うか……

でも仁美ちゃんや上条くんの名前が出てきたって事は……確か結婚式がどうのこうのって……

って、早くしないと遅刻しちゃう。

食事の時にかかっていたテレビではニュースが流れていた。

「ここ、見滝原で14歳の少女二人が殺害されてからひと月余りが経っていますが、事件の進展は当初より何一つ進んでおりません。

この事件での警察の怠慢を疑う声が……」

またこのニュース。街はずれでわたしと同じくらいの双子の女の子の傷だらけの遺体が発見されて、その現場の近くに切断された誰かの右腕があつた事件だ。

「まどか、早く食べないと遅刻するよ」

ママに言われてわたしは食事の手を早める。

「しっかし聞けば聞くほど酷い話だな。女の子二人も殺すなんて口な奴じゃないと思うね。まどかも十分気を付けな」

わたしは無言でうなづいた。

いつもと変わらない朝、いつもと変わらない風景、そしていつもと変わらな……

ドンッ！！と音を立ててわたしは尻もちをついた。あっちゃ、誰かにぶつかっちゃったみたい。

「大丈夫？」

スツと黒い手袋をつけた右手が差し出される。わたしはその手を取り……えっ？

固い、まるで人の手じゃないみたいに固い。それとなんというか、温もりが感じられない。まるで機械のような……

「おーい、まどか。そんなところで何やってるんだ？」

「あつ、すみません。ありがとうございます」

お礼の言葉も早々にわたしはさやかちゃんと仁美ちゃんの所へ走って行った。

「まど、か？」

後ろの人が何かを言ったような気がしたけど、よく聞こえなかった。

「あれが、鹿目まどか？」

おれは先ほど彼女に触られた『右腕』をさする。って、これじゃおれが変態みたいじゃないか。

「キユウの野郎が言っていた候補ってんだから、どんだけすげえのかと思ったら、大したことはねえ……かな？」

ポケットから小瓶を出し、クピリと一杯飲む。

「……ッ！！ヤバい、若返ってたって事すっかり忘れてたわ。こんなに酔っぱらってどうすっかな……」

「いいですか女子のみなさん！卵の焼き加減にケチ付けるような男とは交際しないように！！そして男子は！くれぐれもそういう大人にならないように！！」

早乙女先生の泣き言で朝のHRが始まった。この人の男運の無さは本当にひどい。この間は納豆にネギを入れるか入れないかで別れた

らしい。

「あー、あと転校生を紹介します。暁美さん、入ってきてー」
いやいや、そっちが先だろ！と言うツツコミを入れる暇もなく一人の女の子が入ってきた。

「暁美ほむらです。よろしくおねがいします」

「うつわ、すごい美人じゃん」

さやかちゃんはある言ってるけど、あの子って、夢の中の……
でも、なんだか……嬉しそうな顔、してる？

「あの、鹿目さん？ちよつと気分が悪くなったので、保健室に……」

「え？うん、いいよ、ほむらちゃ……」

しまった、何故か馴れ馴れしく呼んじやった。

「……！！」

ほむ……暁美さんは驚いたような眼でわたしを見ていた。そのまま先へとずんずんすすむ暁美さん。

「あの、暁美さ……」

「ほむらでいいわ。何？」

ああ、なんだか目が怖い……夢で逢いましたか？なんてとてもじゃないけど……

「あの、ほむらちゃんとわたしって、以前どこかであったんじやないかって……」

またしても驚いた顔。いったいどうしたんだろうか？

「ほら、ゆ〜め〜であえたならって歌もあつたし、って知らないかこのネタ……って、ほむらちゃん？」

ほむらちゃんは、目から大粒の涙を流していた。

「鹿目さ、いえ、まどかつて……呼んでいい？」

涙声になりながらほむらちゃんはそう聞いた。

「うん、いいよ。どうしたの？」

「まどかは……家族や友達の事、大切に思っている？」

「うん、大切だよ。家族も、友達も、もちろん、ほむらちゃんもだ

よ」

「そう……じゃあ、これだけは覚えておいてね。この先、どんなつらい事が起こっても、何があるうと、まどかはまどかのままで、絶対に変わらないで」

「うん、いいよ。わたしはわたしのまま。これでいい？」

「ありがとう、と言ってほむらちゃんは涙を拭って保健室へ入って行った。」

ほむらちゃんの言うとおり、わたしはわたしでいよう。夢の中のわたしは、今のわたしから見たら、最後はちよつとさびしそうかったから……

「仲良き事は美しき哉、泣けるねえ」

おれは二人の様子を近くのビルの屋上から見ていた。言っておくがおれは決してストーカーとかそういう趣味がある訳ではない。

「そうだね、あの二人はこれほどに無い力を持っている。だから君が手を出さなくても大丈夫だと思うんだけど……」

いつの間にか俺の肩に白い生物ナメモノが乗っていた。

「久しぶりだな、キュウ。それはそうと、あの子たちがあの魔女とか言うバケモンとかと戦うだけならまだいいんだけどよ、この見滝原には『ヤミー』の気配がたんまりとするんだよ。実際、それに関わって魔法少女になった奴も居るんだろ？」

「そうだね。事実、僕が最初から手をかけている魔法少女は、それが引き起こした事故で両親を失って契約したからね」

「だろ？それに万が一、いや億が一にも無いとは思うが、『グリード』に遭ったんなら魔法少女ではまず勝ち目がない。そうだろう？」
キュウは後ろ足で首をしきりに掻きながら話す。

「いや？最近是对グリード用の特殊装備が見滝原の巨大企業で開発中だって話だし、大丈夫なんじゃないかな？それにこの街には君の『同業者』が何人かいるから彼らに任せるって言うのも……」

「対抗する人数は多い方が良いし、『コアメダル』や『セルメダル』

も多くあればあるほどいいわけだよ、キュウ」

「やれやれ、君は普段はいい加減なくせに、こういう時になると突然ガチガチな性格になるからわけがわからないよ」

そう言つてキュウは何処ともなく消えた。突然現れてはいきなり消えるからこつちがわけがわからない。

「ま、どんな奴が来ようと関係が無いけどな。おれの前に立ちはだかる奴は……」

おれはポケットから『銀のメダル』を取り出す。

「こいつとこの『右腕』でブツ飛ばしてやるだけだ!!」

と、手すりぐぐにやりとまがり、体勢を崩したおれは前のめりに転落しそうになった。

「うおっ!! し、しまった。力を入れすぎたか。まだ1話の前半なのに、こんな下らない事で死んでられるかってんだ!!」

夢で違いましたか？なんてとてもじゃないけど（後書き）

1話前半にして大ピンチの『おれ』
こんな調子で果たして大丈夫か？

いろいろとアレな部分を修正

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0926v/>

魔法少女と欲望の騎士

2011年10月8日22時08分発行